

第2章 本居宣長『古事記伝』②

前おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第二節 「成りませる」と「成る理」

本居宣長が「神代一之巻」の冒頭、「天地初発之時、於高天原成神名」（天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名）を日本語に解釈したのを例にあげてみる。「天地」はアメツチで、「阿米都知」であるはずなのに、なぜ「天地」と漢字のまま綴っているのだろうか。宣長は『古事記』の第一行第一文字から問題にした。それは文字をもたなかった日本が漢字を借りたからである。稗田阿礼は『帝紀』『旧辞』を太安万侶に語り伝えるとき、アメツチと誦んだはずだった。それなら「天」は阿米であって、それを漢字の「天」にしたのでは、本来の意味など見えてはこない。

そこで宣長はアメは「その上にありて、あまつかみたちの坐（まし）ます御国なり」と読むことにした。では、「地」はどうか。これはツチである。ツチは「ひじ」（泥土）がかたまつて「くに」になった状態ではないか。そのように宣長は解釈して、なぜそのように解釈できるのかの例証を、万葉・祝詞そのほかの資料に引いていく。ここでわたくしには即座に、中山みき口述の人間創造・救済説話である「泥海口記」（「元の理」）が思い出された。

宣長は、たった「天地」2文字だけでもこれだけの考証と推理をするのだから、この仕事は壮絶そのものである。こうしてまさに一匹の虫が地球を歩むような思索歩行（松岡正剛）によって、やっと次の「於高天原成神名」にたどりつく。宣長はここで「成」（なりませる）に注目をした。宣長の「成りませる」に通底するとかんがえられる思想は、教語では「成る理」ということばであろう。天理教原典「おさしづ」には、「成る理」は、「成る理成らん理、そこでどうせこうせ言わん。思うよう成るも思うよう成らんも一つ理。どうでも精神一つ。」（さ28・9・25）など10回ちかく見られるが、この「おさしづ」引用の前に、『天理教事典』では「成る理」を次のように解説している。

物事が成ってくるには、すじみちがあり、そのもとになる〈もの〉、また結果として成ってくる〈こと〉がある。「成る理」は、こうした筋道や、もとになる〈もの〉、成ってくる〈こと〉を指してつかわれる。

物事が成るのには、神の働きと人間の心の両方がかかわっている。物事が成るのは、神の働きによるのであるが、心次第と言われるように、誠の心に対して神は働かれる。誠の心・精神が、物事が成るもと、つまり「成る理」である。（〈 〉は筆者の追記）

「おふでさき」にも、

日々に澄むし分かりし胸の内
成人次第見へて来るぞや (六一-15)

人間を始めかけたは魚と巳と
これ苗代と種に初めて (六一-44)

それよりも生まれ出したは五分からや
五分五分として成人をした (六一-48)

とある。六号15番のお歌は人間の精神深化・純化の成人を、そして45、46、47番につづく48番の成人は、神の守護による肉体進化の成人を示している。くわえて、精神的・宗教的な成熟を意味する「成人」という教語を中心としたその周辺には、心の成人、心の立て替え、心の入れ替え、心のふしん、心

の道、心の汚れ、心一つが我がの理、心次第、心味い、心得違、心定め、心尽くし等々、天理教の信仰実践に関する日常化された用語がとり巻いている。「成人」とは、同じ言葉でも成人式といわれるような通過儀礼的な年齢とは意味が全く異なっており、神ののぞまれる「人」に「成る」ことなのである。さて、宣長はこの「なる」（成る）には3つの意味があると考えた。

第一には、なかったものが生まれ出るという意味

第二には、何かのものが変わって別のものになるという意味

第三には、「なすことがなしおわった」という意味である。

それぞれ、人が生まれること、一体の神が別の神になること、神が国を生んだこと、などにあてはまるというわけだ。宣長はそうだとすれば、日本本来の「なる」とは、これらのどれにもなりうることを意味する「なる」の意味をもってたと仮説した。いや、宣長はそう決めたと松岡正剛は「千夜千冊」における小林秀雄著『本居宣長』の解釈のなかで述べている。

吉本隆明の『思想のアンソロジー』における「おふでさき」《解釈》の（なる）という仮名カッコ入りの追記の謎は、宣長のこの「なる」の3つの意味を含蓄していると推測される。

「成神名」の「神」そのものの解釈についてはどうか。宣長はこのカミは「迦微」ということで、意味はまだわからない。ともかくさまざまな日本の「社」に鎮座する「みたま」（御霊）であろうと推測する。「元の理」の台本となった「こうき話」からすると、神名を授けられた親神の働きである神仏の裏守護に対応する。その裏守護の在来の神仏名には合理的なつながりはない。おなじように宣長は、神とはきつと「かしこきもの」と言われてきたもので、尊いものや優れたものだけをあらわしているのではなく、悪しきものや奇しきものもふくんでいるだろうとみたらしい。ようするに「すぐれてあやしきもの」、それがすべてカミなのだというわけである。宣長はこうした解読作業を一語一語『古事記』全文にわたってやりぬいたのである。なんとも恐ろしい探求であるかと、博識博学の松岡正剛を「千夜千冊」のなかで驚嘆せしめている。

『古事記』全文の一字一字を、このように33年間もついやして解読した、宣長の「おふでさき」解読者、執拗な信仰探究者が、そろそろ中山みき集団の中から出てきてもよいのではないか。教祖が要請した「つとめ」人衆の「ふでとりがくにん」（筆執り学人）20人とは、「つとめ」が世界人類救済を目的とするかぎり、宣長のようなレベルの高度な人材を必要とするという意味があつたにちがいない。「元の理」における「文字の仕込み」は「陽気暮らし」には必須であつたとの「意」の「知恵の仕込み」が、その説話の最後に重要な神意であるとして締めくくられているからである。日本国創世記である『古事記』や『日本書紀』には、そのレベルにいたる人材が輩出されたのであつた。ようするに「漢に」対する、新生独立国としての尊厳と誇りの獲得に対する命がけの知恵の「こと」への挑戦者である。

なお「成ってくるのが天の理」「成っても成らなくても」「成らん事情」「成りたつ」などに見られる「成る」は全「おさしづ」を通して905項目も見られる。「おさしづ」の主軸概念としての「為す」と「成る」の十全の守護における対応性については、拙著『中山みき「元の理」を読み解く』（579～582頁）を参照されたい。